

「国の重要無形民俗文化財」

佐原の山車行事

市内の伝統的な祭りのうち最も大きな祭りは、夏と秋に行われる佐原の大祭です。

佐原の街は小野川を境に、東岸10町内を本宿、西岸15町内を新宿と総称し、本宿では7月中旬に八坂神社の祇園祭、新宿では10月



▲明治42年当時の猿田彦
（『佐原山車祭調査報告書』より）

中旬に諏訪神社の大祭が行われます。

この両祭礼の附祭として行われているのが「佐原の山車行事」です。各町内が意匠を凝らした大きな山車を曳き廻す行事は、平成16年2月に国の重要無形民俗文化財に指定されました。

山車の構造

山車の本体は、最上部の露台とその下の囃子台の二層構造になっています。土台部には、ハンマと呼ぶ寄木造りの4つの車輪が付いています。山車により異なりますが、本体の高さは4m程になります。囃子台には下座連と呼ばれる囃子方が乗り込み、山車の運行に合わせて佐原囃子を時に華やかに、時には優雅に演奏します。

露台の上には大きな飾り物が据えられています。鯉や鷹の藁細工もあります。多くは神話や歴史上の人物をモチーフにした大人形で、山車全体で9m近くにもなります。この大きさと町内特有の飾り物が山車の最大の特徴です。

両祭礼に関する起源や変遷などは、不明の部分が多いのですが、少なくとも江戸時代の中頃には現在の山車行事につながる練り物の祭りが行われていました。

その後、徐々に発展する過程で山車が登場し、その上に職人の手による大人形が飾られるようになったのは江戸時代末期ごろと考えられます。

水郷佐原山車会館には、かつて旧関戸町の飾り物であった「猿田彦」人形が展示されています。頭部（全高93・4cm）と両手部で、製作年代はわかっています。

大人形の登場

古文書によると、それまで飾り物はこれと決まったものではなかったのを、享保18年（1733）に、新宿の有力家であった伊能権之丞家から夜着を借り受けて、猿田彦（大天狗）の飾り物を出したところ、これが当たりとなり、それ以来関戸は飾り物を猿田彦にしたとされています。

元文4年（1739）ころには、猿田彦の御頭が出来たと伝えられており、この時から猿田彦は現在の山車人形に近い大きさに変化していたとも考えられます。

また新宿の祭礼では、山車行列が神幸列を先導するスタイルをとっており、関戸町が触れ頭として行列の先頭に立つのが決まりました。最前列に立つ大きな猿田彦人形は、さぞかし見物の人々を圧倒したことでしょう。往時の猿田彦は格別に大きなもので、かつては潮来からもその姿が遠望できたという話も伝わっています。

市指定の猿田彦は長年の使用と劣化で、各所に損傷が見られます。また、ここかしこにモルタルや銕などで補修された跡も見受けられます。一見すると痛ましい姿に思われますが、それが山車行事の歴史を物語るものといえます。



▲旧関戸町の猿田彦（山車会館）